
勇者様に恋しなければいけませんか？

連音 優妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者様に恋しなければいけませんか？

【Nコード】

N5811W

【作者名】

連音 優妃

【あらすじ】

過去一番の領土を誇ったフュミニニア国の第二王女、レナサード「フュニア」アレシア。

国一番の美しさともいわれる美貌を持つ王女がある日魔王を名乗る者にさらわれた。

召喚された美形の勇者、宮廷付きの美形魔術師、美形シスコン兄――数々の美形に愛された彼女が選んだ人物とは？

ファンタジーの王道ともいえる勇者と姫君とそのたもろもろの美形

の關係が王道からどんどんずれていくお話です（by 作者）

第一話 アイル「私がお仕えする姫様」

私の姫様は大変お美しいです。

ウェーブがかかった金色の髪は腰まで届く長さだというのに枝毛一つなく。

薄い茶色の瞳は同性ならば嫉妬してしまう程長い睫に覆われている。

どれをとっても完璧といえる美貌の持ち主、それが私のお仕えする姫様——レナサード様です。

もちろん姫様を愛する者は少なくありません。

強い魔法使いや他国の王子、精霊に至るまで、愛されています。精霊の加護の影響でそこそこ強かったりもします。

——もちろん、過去で一番の領土を持ったこのフュミアニア国の姫に戦う機会などいまだ一度もありませんから、強いだろう、という話ですが。

……ああ、まだ自己紹介をしていませんでした。

私はアイル＝ミーシア。一応小さな家とはいえミーシア家は貴族になるので、上級侍女です。

姫様の第一侍女をやらせて頂いております。

そして、恐れながら姫様と親しくさせて頂いております。

「姫様、入ってもよろしいでしょうか？」

承諾を得てから私は扉を開けました。

「イノストア様をご用意があるそうです。後程音の間に来てほしい、とのことです。」

イノストア様は第二王子様です。……まあ、姫様の兄上だけあって美形です。物凄く。

そろそろ伴侶の事も考えろ、というお話でしょうか？

……いや、むしろしばらく伴侶を認めなさそうな過保護さでした。
イノストア様は。

「兄上が……？ 伴侶の話かしら。わたくしは嫌だと言っていますのに。」

「……いや、例えば様が伴侶としたい方を見つけたとしても、許可はされないと思いますよ、王様に言われたとしたら、別かもしれないが。」

私の言葉に、様がぐすりと笑った。

「ええ、そうね。兄上は少し、過保護すぎるもの。」

その華やかな笑みに思わず見入ってしまいました。……流石、国一と言われる美貌です。神に二物も三物も四物も与えられただけあります！

……その時です。まるで私が見入った時を見計らったかのようなタイミングで様の後ろの大きな窓が割れました。

その後ろに、宙に浮かぶ黒い物体——もとい、全身黒い布をまとった者がいます。

下級魔物にしては、人型です。それに——この城には強力な結界が張ってある筈です。そこらの魔物に破られるはずがないのです！ 驚きに思わず固まっていた私は、様の悲鳴で我に返りました。

その者が——人型の魔物が、様を抱えていました。

「様っ！？」

大きな音と、様の悲鳴を聞きつけた人達がぞくぞくと集まってきます。

「レナサード！」

イノストア様が呼び掛けますが、その時にはもう、様はぐったりとしていました……というより、眠っている、のほろが正しいでしょうか。その顔に苦痛の色は見られず、こんな状況だということに思わず見とれてしまう程でした。

「我はアズト！ 全ての魔物の上に立つ者だ！ この姫はもらってゆく！」

……魔物が消え去って、辺りが一瞬、静かになりました。

わざわざ名乗って消えて行ったあの者それに私は青ざめました。

そこらの魔物に捕まったのならまだいいでしょう。……勿論、そ

んな事は宮廷魔術師が許されませんが。

しかし、あの者は全ての魔物の上に立つ者。——つまり、“魔王

”なのです。

「……兵だ！ 姫を追え！ 今すぐだ！」

イノストア様の命令に兵が慌てて集まり、すぐに出て行きました。

……これで姫様が戻ってきたら終わるのですが。

第一話 アイル「私がお仕える姫様」(後書き)

まだ連載全然終わってないのに新しいの書いてる奴ですw w
↑
よろしく願いますm(_ _)m

第二話 アイル「王様の決断」

この世界には昔から人間と魔法族、竜族が住んでいました。ところがある日、時空の歪みから入り込んだのか、魔物が現れました。

魔物はまず人間を襲い、それから魔法族や竜族を襲ってその力を形にしました。

それが、最初の魔王の誕生です

当時のフュミア国王は宮廷魔術師が実験していた召喚で異世界から女神と相性のいい者を連れてきました。

細かい経緯は分かりませんが、まあ、魔王は倒されたのです。

二回目、三回目、四回目も無事、勇者が魔王を倒しました。

この頃から、一つの疑問が浮かび上がっていました。

魔物も勢力を伸ばしているようで、一回目より二回目、二回目より三回目、三回目より四回目の方が被害者が多かったのです。

それなのにも関わらず、魔王の力は変わらない。

そして、もしかた魔王が現れるようならば、その力は蓄えられた力が加えられている、以前より強いものになっている、と言われ始めたのです。

ここ数年で、魔物の被害が酷くなっていたので、魔王誕生か、と警戒はしていました。

そして実際に、姫様は連れ去られてしまったのです。

出した騎士がぼろぼろで帰ってきました。……姫様は連れていません。

出した騎士は戦った者は全滅寸前。民家が無いところで戦ったよ
うなので一般人は被害なしですが、一発で全滅してしまいそんな魔

法にあったようです。

魔法が作動する直前について行った宮廷魔術師見習いノアト様が最大限、一番強い結界を張ったようですが、周囲の騎士しか守れなかった、と。

その他にも、遠回りして後ろ側にまわろうとしていた騎士が巻き込まれなかったので半分は残れたようです。

「……ということは、やはり魔王は今までの比ではない、ということか？」

報告を受けた王様の深刻な声に宮廷魔術師サードス様の代わりに行ったノアト様が答えます。

「今回の魔法はレナサード様の力を最大まで無理やり使って起こしたもので、今後は使われないと思います。ですが、今までの魔王よりの力が大きくなっているとみられます。」

「そうか……」

辺りが静まり返ります。皆の視線が集まる中、王様が決断しました。

「……本来は異世界の者を安易に巻き込みたくないのだが……仕方あるまい」

そして、王様は広間に響き渡るように言いました。

「明日、女神から光の力をもらう者——勇者となる者を異世界から召喚する！サードスは結界魔法の跳ね返りで弱っておるからノアト、お前が補助しろ。くれぐれも失敗の無いように今からしっかりと休め。以上だ。さがってよい。」

召喚に失敗すると、関係の無い者を巻き込んだり、最悪の場合その者が時空の狭間に閉じ込められてしまうかもしれません。まあ、時空の狭間には夢の世界が広がっているとされていますから、自ら行きたいと願うものもありますが、やはりそれは必ず防がなければいけません。勿論、それは素人がやった場合の事。サードス様とノアト様ならないとは思いますが、言い切れるわけではありませんし、サードス様は結界をこじ開けられたことによって跳ね返った魔法で

弱っていますし、ノアト様も結界に使い果たしたと言ってもいい状態です。

本来ならば、もう少し待ってから召喚するところですが、勇者が訓練する時間も考えるとそんな余裕はありません。

それ程深刻な状態なのです。——異世界の方には悪いですが、このままだと国中に被害が出ます。姫様という捕虜がいる状態にある向こうからすれば、姫がいる限り安全と言ってもいいのです。

なにせ、魔王は大陸のはるか北の方に城を作っています。姫様もそこに閉じ込められているはずで、魔王を倒してしまうと魔王の魔力で作られていたそこが崩壊します。——つまり、姫様が危ないのです。

ですから、一刻も早く、召喚の儀式をしなければなりません。

第二話 アイル「王様の決断」(後書き)

片仮名の名前って苦手だw w

勇者召喚!で、やっと平仮名の名前出てくる……かな? w w

第三話 レナサード 「王宮では無いお城と黒髪の少年（１）」

目覚めた私は違和感を感じました。わたくし

いつもと同じ部屋です。なのに、妙に違和感があるんです。

「……お目覚めですか、姫君。」

「っ！？」

ベッドのすぐ横に整った顔の男性が立っていました。

いつの間にいらっしゃったのですか、この方は！

それだけではありません、宮廷でこのような方、見たことはありません。

それに——私の身の回りの世話をしてくださるのは……

「……アイル、は？」

「姫君、ここに来る前の事——よく思い出し——ください。」

その言葉を聞きながら急激な睡魔が襲ってきました。……このままだと、この方に失礼になる——そう思いながらも、意識が遠のいていくのを感じました。

——姫君、貴女の持つ力を私にお貸しください。わたくし

優しい声と共に、すうつと、何かが抜けていくような感じがしました。

いつかの時に現れた“精霊”と名乗ったうつすら透き通るあの子たちが、力だと言って与えてくれた時のような、優しい風が通って行くような感じに近い。

先程まで恐怖を感じていた相手なのに、安らぎが感じられるのです。

……恐怖？……そんなもの、私は抱いていたのかしら。わたくし

考えるよりも早く、私は優しさに包まれて眠りにつきました。

「……姫君。」

透き通った男性の声に私は目を覚ましわたくしました。

「そう……私は確か魔物らしき者に連れ去られて……じゃあここはどこなのですかっ!？」

ああ、いつも冷静に、声を荒げるな、と言われていましたのに、忘れていました。

男性は一瞬、私が声を荒げた事に驚いたようですが、すぐにその口元に柔らかい笑みを浮かべました。

「ここは魔王の力によって作られた城です。——内装は、魔王様が姫君の部屋の様に作られました。」

そこで言葉を切ってから、ふと思い出したように傍らの机に暖かそうなパンを置きました。

「お腹が減っているでしょう? 食べてください。……ああ、決して危ないものではないのでご安心を。魔王様は姫君を傷つけようなどとは思っていらっしやいませんよ。」

それでは、と消えようとする彼を慌てて呼び止めました。……ああ、また慌ててしまいました。

「貴方、名前は？」

「トズ、とお呼びください、姫君。」

そう言うと、今度は呼び止める暇もなく消えてしまいました。

暇になった私は、トズという少年の姿を思い出しました。

年齢は……私と同じくらいでしょうか、十代後半、という位です。容姿は見とれてしまうほど美しかったです。

艶やかな髪にキレ長の瞳。それを覆う睫毛は長くて、その全てが美しい漆黒です。

背は私達兄弟の中で一番高い第二王子イノストア兄様より高く、私が少し見上げる様な形になります。

漆黒の髪ということは、魔族かそれに操られた人間、もしくは魔族と化せられた元人間になるのですが、もし王都を歩いたならばそ

の美しさ故に女性から注目を浴びるでしょう。

……お腹がすきました。黙っていると小さくお腹が音を立てています。

はしたないと思いつつも、あまりの空腹感に少しがついてしまった気がします。……もし王宮でしたら、アイルに苦笑しながらたしなめられていたでしょう。

ぐるりと部屋を見渡すと、本もそのままありました。

いつも読んでいるそれも読む気がせず、残りのパンをゆっくり食べ終わったのを見計らったかのように、ドアが叩かれました。

「……姫君、入ってもよろしいですか？」

トズの声だったので承諾すると、ドアが開けられました。——廊下まで王宮そっくりだったので、一瞬本当に王宮なんじゃないだろうか、と思ってしまいました。

「——失礼します」

「……え？」

再び、あの強烈な睡魔に襲われる。そう認識した時には、もう意識が途切れていました。

第四話 レナサード 「王宮では無いお城と黒髪の少年（2）」

目が覚め時には、先程の部屋とは違う部屋にいました。

黒い大理石の部屋——王宮にこんな所、私が知る限りではありません。
せん。

「よく来たな、姫君よ。」

低い声が響いて、周りを見渡していた私は動きを止めました。

私がいる所の丁度向かい側に、黒いマントの者が居ました。

背はトズよりも遥かに大きく、高い、というよりも巨大という言葉
葉が合いそうなほどです。

私の記憶が正しければ、この者は……

「貴方が、魔王なる者ですか？」

「ふむ……魔王か。」

私が声をかけると、魔王とみられる者が嗤った気配がありました。
「人間共は皆そう呼ぶな。……我は全ての魔物を統べる者。アスト
だ。」

「……何故、私をこのような所に連れてきたのです？何が目的なの
ですか？」

次いで質問に、再び魔王が嗤いました。

「随分と強気な姫君だな？てつきり泣き喚く様な正確だと思ってい
たが……」

「答えてください。」

今回の言葉は、無視しました……私は、そこまで気弱ではありま
せんし。この者などに涙を見せるつもりも今のところございません。
だって、女の涙は最終兵器だ、と姉上も申しておりましたもの。

「何故、ということだったな——姫君が我の妻となる者になるから
だ。」

……は？

「姫君には、我が妻となる事を神に誓ってもらう。」

瞬間、魔王が近くに来ましたが、私はそれどころではございません。

私はふつつと怒りが込み上げてくるのを感じました。

私は元々、お淑やかな淑女などではございません。

アストナやアイルに怒られるかもしれませんが、ここはもう言葉遣いを気にしている暇じゃありません。

なので……私は、魔王に思いっきり蹴りを入れました。

「妻だあっ！？あたしの実際の性格も知らない奴が何をふざけた事を言ってたんだっ。あたしはてめーなんかの妻になる気なんてこれっぽっちもねえんだよ。てめーが勝手に決めるんじゃないやねえ！」

言い切ってから、少しのアストナやアイルへの罪悪感を振り払い、あたしは魔王の姿を見ようと顔をあげた。

「……っ！？」

蹴った時に、マントが落ちたのは分かっていた。

でも、これ程までに動揺するとは思わなくて、でも実際にあたしは動揺していた。

そこに居るのは黒髪の美しい少年——まぎれもなくトズだったから。

第四話 レナサード 「王宮では無いお城と黒髪の少年（2）」（後書き）

王女様、素と外面の差はむしろ二重人格並みww

第一王女も、発言からして大人しい美女では無さそう。涙は女の

最終兵器で……お淑やかな王女様はどこ行ったww

第五話 レナサード 「魔王は魔王らしくない？」

「むかつくむかつくむっかつくっ！」

淑女らしさなどこの際気にしてられない。

あたしはレースが下がった天蓋ベツトに飛び込んだ。

あの魔王——アストとかなんとか言ったが、この際名前なんて覚えなくていいだろう。——は今何しているのだろうか。

少し恐々と覗き込んでくる精霊達に微笑みかける。

——ここまでの経緯を説明しよう。

あのあと、トズの姿を確認した後。

“魔王”が停止した一瞬の隙に、精霊たちに叫んだ。

ここに連れてくるように、と。

流星に離れすぎなのか、なにか張ってあるからなのかは知らないが、王宮までは戻れなかった。

今考えれば結界を破る試みでもしてみればよかったんだけど、もう精霊達も力を使いきったっぽい。

……っていうか、キレてたせいか若干怯えられてる気がする。

それで、何故試みなかったか、だが。

勿論あまり思考が回らなかったというのもあるのだろうが。

……多分、嘘であってほしいと、それを確かめたいととっさに考えたのがあると思う。

本当は不安でたまらなかった。

魔王に捕らわれて、不安じゃないほどあたしは強くない。

民が知ってるほど、大人しくもない。振る舞っているほど、強くもない。

中途半端な存在。

不安で、怖くてたまらなくて。

トズに会って、少し暖かくなった気がした。

……なのに、あれは、あの笑みは、声は、全部ウソだった。

それが悔しくて、ムカついて、何よりも――

……あれ？

そこでずれに気づいた。

……違うだろ、あたし。

確かにあたしを騙してた事にはムカつくが、なにも傷つかなくて
もいいじゃないか。

それより問題は別だ。アイツは私を何にするといった？妻だ！ふ
ざけるんじゃない――と思っけていてもやっぱりフードをかぶったト
ズの姿がちらついて。

トズに少し恋をしていたことに気が付いた。

吊り橋効果。

勇者として召喚されたのち、姫君の――あたしの曾御婆様の伴侶
となった曾御爺様が以前教えてくれた言葉が浮かんた。

別に恐怖と一緒に体験したわけじゃないから使い方としては違っ
んだらうけど、それに似てると思う。

……つまり、周りの状況のせい、って方面で。……多分。

「……何やってんだ、あたし。」

恋した相手が魔王だったとか、救われなさすぎる。

ふうつとため息をつくとき、少し落ち着いた。

怒りよりも、自分への呆れが勝った気がした。

……せっかく落ち着いたから、一人称くらいは直そうと思う。ア
イルの前で“あたし”とか使わないために。

そう考えた時、こんこん、と遠慮がちに扉が叩かれた。

「姫君、入ってもよろしいですか？」

“魔王”の低い声ではない、最初に会ったトズの声が聞こえる。

さつきもきていたが、この魔王は暇なんだろうか。

「……………なんでその声なの？」

「……………えっ？」

ぼつりと呟くと、扉の向こうで小さく返ってきた。

「だーかーらーっ、正体ばれてんだからいちいちその声にならなくてもいいでしょーが！」

返事が返ってきた瞬間、少し喜んだ自分が恥ずかしくて必要以上に大声を出す。

「いちいちもなにも……………コレ地声。」

「……………え？」

あつさりと返ってきた言葉に間抜けな声が漏れる。

扉の向こうでトズ……………じゃなかった、魔王が笑った気配があった。だつて、こんな声で魔王つつつても信じないっしょ？」

……………は？

「……………そんな理由で？」

「それが大事なんだよ……………ねえ、入ってもいい？」
さらりと言い切った魔王にため息が漏れる。

——これが、世界を恐怖に陥れる魔王？

この背が高くてム力つくほど細い、あれが。

そう思うとふいにバカらしくなって、意地張ってる自分もバカらしくて、ため息をつく。

「……………いいよ。」

その言葉がよつぽど意外だったのか、扉越しでも魔王が驚いたのが分かった。

「失礼、します？」

「なんで敬語で疑問形なのよ？」

まったくもって魔王らしくない。

「……………あ、そういえば。」

「……なに？」

「腕に婚約の証の腕輪、ついてるから。」

魔王がにっこりと笑う。

「ちなみに外せない呪い付き。よろしくね、奥さん？」

「……はあああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああああ
 あああ！？」

——やっぱりこいつは魔王らしいかもしれない。

第六話 レナサード 「お試し花嫁期間」

「……おい、姫君ー、入るよ？」

声と共に、閉めた筈の扉があいて、やっぱり魔王なんだな、と変なところで納得した。

「勝手につけたのは謝るって。だからせめて返事くらいしてくれないー？」

ベッドによって来る魔王をちらりと見てから、自分の左腕を——正確には、その腕にはめられた腕輪を日にかざす。

少し太めの銀色に輝く腕輪は、中央に赤い大きな宝石が付いていて、それを囲むように小さなオレンジや黄色の石が埋め込まれていた。

曾御婆様は何故か指輪をつけていたけれど、基本的にはこの世界では婚約の証として腕輪をはめることになっている。

装飾品なら右腕、婚約の証なら左腕に。

「……外してくれるんなら返事するよ。」

「それがもう返事になってるけどー？」

「うっさい。」

本をぱらぱらとめくりながら言うと、酷いなあ、という声が横から聞こえてくる。

「……こいつは、怒ってるのが馬鹿らしくなるような奴だなー。」

ふうつとため息をついて本を投げ出す。

「姫様ってさー、外面と内面全然違うよねー？」

「……それで呆れて外してくれるととってもありがたいんだけど？」

「いや、知ってたし。」

「……あ、そーですか。」

むすつと頬を膨らませると笑われた。

「第一、あたし……わたくし私は妻なんてしませんわよ？」

「でも証は絶対だよ？外せないし。……っっていうか、口調直さなく

ていいから。」

「……わかった。」

言うこと聞くのは癪にさわるが、はつきり言うところのままでいいのは楽でいい。

素直じゃん、とかにやにや笑う“魔王”をじろりと見てから、試しにもう一度腕輪を引っ張ってみる。

たっぷり余裕があつたはずの腕輪は、引っ張ると途中で小さく縮まつた。

「……無駄だよ？」

腕輪を外すのをあきらめて、にやつと笑った“魔王”の顔を見る。あたしが自分の方を見た事が分かった“魔王”は、相変わらずにやにやと笑いながらすつと白い手をのばして腕輪を撫でた。

「試しに、お試しで嫁さんやってみない？」

につこりと微笑む“魔王”はやっぱり美形で。

「……面白そーじゃん。」

それに騙されたわけではない……はずであってほしいが、あたしはにやりと笑って頷いていた。

第六話 レナサード 「お試し花嫁期間」(後書き)

次はアイルさんターンです。

第七話 アイル 「美しい勇者様」

魔方阵が強い光に包まれて周囲が感嘆の声をもらします。

……中は眩しくないのだろうか、とか考えたのは私だけでしょうか？

……それはともかく。

光が静まり、中から出てきたのは、美しい少年。

年は姫様や私と同じくらいで、十代後半。

大きな瞳と長い睫毛。幼さの残る、どちらかというと女性のような、でもふつと時々頼もしい表情を見せる方です。

彼は姫様を救ってくださる勇者様。アキ様です。

「流石勇者様」とか、「強い光の力」とか、「これならあの魔王でも」とかお決まりの言葉を言ってる人もいますが、私達侍女はというと、力より容姿を見ています。

はい。はつきり言うと、きゃーきゃー言いたいのです。この状況でなければ。

守りたくなるような愛らしい容姿だけど、困った時には頼りになるような、そんな方です。

さっきだって、いきなり連れてこられたというのに騒ぎもせずサードス様やノアト様に質問をしていました。

……こう分析している時点で不謹慎なのですが。

……さて、話を戻しましょう。

勇者として呼ばれたアキ様は、たった今、女神の加護を受け、その力を覚醒させました。

魔方阵が強く光れば光るほど、力が強いこととなります。

話にしか聞いておりませんが、先代勇者様より強いとか。

それで、正義感の強いアキ様が承諾してくださったところで明日、

同行者となる剣術士と魔術師を決めるそうで、今からお城の案内をするのですが――。

「アイル。」

「は、はいっ」

王様の威厳に満ちた声に呼ばれて、私は反射的に背をぴんっと伸ばしました。

「お主、勇者殿を案内してくれぬか？」

「……え？あ、いえ、あの、私わたくしでよろしいのですか？」

「うむ、勇者殿が、王女付きの侍女に案内願いたいというのでな。ついでに王女の話話を話してもらいたい。」

後ろで侍女仲間が羨みの声を上げてますが、なんなら変わってもらいたいです。

アキ様は姫様を救い出す希望の光。もし私がご案内している間に訓練していない勇者様が魔物などに襲われたらどうするのですか！？

……と、叫びたいところですが、陛下のご命令。逆らうわけにはいきません。ので。

「……かしこまりました。」

「うむ、では今から案内してやってくれ。では、下がってよい。」
そう言ってから、陛下が部屋を出たところでアキ様が寄ってきた。

「えっと、どうも？海野空と言います。よろしく願います。」

「え、あ、はい、姫様の第一侍女をさせていただいておりますアイルと申します……って、あの頭を下げないでください！？」

ぺこりと頭を下げたアキ様に、少し周りから視線を受けます。

アキ様は勇者様。一侍女である私に頭を下げるなんて、普通ではありえません。……そんな思いを込めて止めたのに、頭を上げたアキ様は不思議そうな顔で首を傾げられました。

「え、でも、案内してくださるのですよね？」

「あ、はい……あ、あの、進みながら話しましょうか、アキ様？」

正直、周りの視線が痛いです。

不思議そうな顔をしていたアキ様は「あ、はい」と呟いて後についてくださいました。

……あのお辞儀をするのはアキ様の世界特有の事なんだろうが、周りからしたら不思議で仕方ないのです。……これも、勇者様を案内したくない理由の一つだったりします。

ともかく、私としてはさっさとあの場所から離れたかった。

……侍女仲間によると、それも礼儀正しくて「素敵」だそうですが。

第七話 アイル 「美しい勇者様」 (後書き)

勇者様とーじょー。

ややこしい名前じゃないので助かりますw

もう、アキ様、アイル、レナサード王女以外覚えられてませんww

第八話 アイル 「私は男に興味なし？」

「こちらがアキ様にお使いいただくお部屋です。」

一通り城を案内し終え、やっと最後の、アキ様の部屋につきました。

ここまでが大変でした。行く先々で視線を浴び、私はもうぐたぐた。

私の一か月分の視線をまとめて浴びたんじゃないかというくらい、アキ様は注目されていました。

「わ、こんな大きな部屋でいいんですか？」

「はい、アキ様はこの国を救ってくださる勇者様ですから。」

歡喜するアキ様を見ると、本当に今まで普通の“人間”だったんだなあ、つと実感させられます。

アキ様が住んでいらったのは、ニホンというところだそうです。

そこで、コウコウセイという私くらいの年の者が勉強することをしていたよう。私と同年なのに、まだ成人していません。

なんでも、成人は二十歳だそうで、十五歳で成人のこの国よりは、大分遅いです。

やはりお辞儀はこの国では当たり前前の事だそうで、これは納得していただくのに時間がかかりました。

「それでは、後で来ますので、失礼します。」

私と、私のほかにアキ様のお世話を担当することになった侍女が頭を下げてから顔を上げると、アキ様が頭を下げていました。

「……アキ様？」

隣で「カッコいい」だの「礼儀正しくて素敵」だの聞こえてきましたが、あえて無視して、アキ様に声をかけます。

私の声に顔を上げたアキ様はしばらくしてハツとした顔になりました。

「あ、ごめんなさいっ」

「いえ、謝らないでください。……素敵な文化だとは思いますが、私達から見ると不思議なので、人前で避けてくだされば結構です。」

あわあわとしていたアキ様は、私の言葉に安心したように笑みを浮かべました。

——横で、侍女が感嘆の声を漏らしたような気がしましたが、これは再び無視するとします。

「訓練も明日から始まりますので、今日はゆつくりしてください。なにか御用があれば隣に控えておりますのでベルを鳴らしてください。」

失礼します、ともう一度言ってから部屋を出ます——と、侍女仲間に戻まりました。

「……え？」

「アイル、あんた全然きやあとも何とも言わないけど、アキ様に興味無いの？」

「え、いや、カッコいいと思うけど？」

侍女仲間が一番仲がいいと言える上級侍女、テレシアに顔を覗き込まれて私は首を傾げました。——そりゃ、私も一応年頃ですから、カッコいいな、くらいは思うでしょう。

「思うけど？ じゃないわよ！ あんたアキ様相手でもいつもとおんなじだし。年下のくせに妙にアキ様の前でも落ち着いてるし……なんでもこなしてるし……。」

「最後の年下うんぬんは関係ないでしょ。ってゆーか、むしろテレシアの方が仕事早いし、できるし。ついでにモテルし。」

そっついながら確かめるようにテレシアの容姿を眺めます。

透き通るような肌に藍色の切れ長の瞳。肩で揃えられた短めの青い髪は短いといえどもきちんと手入れされていて、制服からのびる足は細く、ついでに言つと胸が大きい。

彼女は宮廷の中でも評判の美しさです。

それはもう、貴族がこぞって誘いをかける程にモテる。……テレシアに言わせると「レベルが低い」らしいが。

「それをいうならモテるも関係ないけど……私はアキ様の前の事を話してるの。あんたいつも通りじゃない。男に興味ないのかと思っただわよ。」

「いやいや、勿論興味はあるけどね!？」

うわ、何地味に結構恥ずかしいこと言わされてんだ、私。

「だってアイルさん、本当に頬も染めないし。……他に想い人でもいるんですか？」

……。

テレシアの隣にいた侍女そのに、アミナの言葉に停止しかけた思考を慌てて戻す。

……なんだこいつ。年下のくせに妙に鋭いぞ。

いや、一つしか違うないし、年下とか関係ないんだけど。

「あ、だまったあ。図星」。流石アミナ、するどーい。」

語尾にハートを付けたようなテンションで言うテレシアに、にやにやと口元に笑みを浮かべるアミナ。

二人を代わりばんこに見てから、言葉に詰まった私はとりあえず声を上げた。

「う、うるさーいつ、ほっとけえっ」

第九話 アイル 「勇者御一行に幼馴染みあり。」

アキ様と共に旅に出るメンバーを決めるその日。

私は、テレシア達が喜びそうな再会——つまり、例の“想い人”との再会を果たした。

「……あれ？アイルちゃんじゃない？」

……へ？

いきなり声をかけられて私は振り返った。

「え——あ、ああつ。もしかして、エルスにい？」

「はい、正解。エルスです。ひさしぶり。」

につこりと笑うのはエルスにい。村の外で名乗るとすればエルス
「アンライオ。」

エルスにいはうちの家が領主をしているアンライオ村の農家の子
——なんだけど、どこの貴族なのかというくらい品がよすぎる。

金色の髪は美しく、肌は輝くように白い。体はほっそりとしてる
が、実は筋肉があったりする。優しいがどこか凛々しさを感じる雰

困気を身にまとい、まあ、基本的にモテた。

おまけに頭脳明晰。一回本気でその美しさを譲ってほしいと言ったことがある程……いっちゃうと、姫様の男バージョンみたいな人だ。

「あいつ変わらず美形なこと……ん？もしかして勇者御一行希望？」

なんでここに……と思ってから直ぐに思い当って口にする。

うん、と頷いたエルスにはやっぱり周りの侍女等から注目を集めていて。

「……勇者御一行が、美形御一行になるかもね。」

「なにそれ。」

「いやだつて、ここで働いてから改めて思ったけどエルスにいろいろすごいもん。あの魔術で落ちるとは思えないし——っていうか、アキさ——勇者様と並ぶにはエルスにいくらいいじゃないと見劣りするから嫌がるかもね。」

「それは関係ないと思うけど……勇者様？ってどついうのだっけ？」

にしし、と笑ってみせると、呆れたようにため息をつかれた。

「……勇者様の顔はかなりでまわったんだけどねえ。ほんと興味ないね……ああ、もしかして移動中？……まあ、勇者様だけど、かなりの美形だよ、そりゃあ、今の君みたいに侍女仲間が騒ぐほどの。」

今の君、というところでいい、っと顔で侍女仲間を指す。エルスにいが振り向くと歓声に近い騒ぎ声が上がった。

——と。

「……ん？」

別のところでそれに近い騒ぎ声が上がってその方向をみる。

「おい、アイルじゃねえか？」

「……ロスアも一緒か。」

掛けられる声に一瞬で声を低くした私にエルスにいが苦笑する。

「まあ、ロスアは剣術の天才だからね。ミーシアさんが是非って馬車まで出してくれたから、来たよ。」

「ああ……お父様とお母様はエルスにいとロスアにベタ惚れだからねえ。勇者御一行に入れたかったんでしょうよ。ついでに私とくつつけば……とか考えてそうで嫌だけど。」

「あー……そういえばそんな企みもあったねえ。僕はいつでもいいよ。」

「その冗談飽きた。」

……ぶつちやけいうと、恥ずかしい。それから一部からの視線が怖い。

「冗談じゃないって——ん、ロスア、どうかした？」

「どうかしたじゃねえ！俺をスルーとはどういうつもりだアイルう」

がるるる、とても言いそうな雰囲気は奴はロスア「アンライオ」

うちの村の美形ダブルとも呼ばれた奴で、まあ確かに美形なのは認める。

頭はめちやくちや弱い、剣術の才能は確かに天才レベル。

耳元で切りそろえられた髪は美しい赤色。一見見れば好青年なのに、喋れば残念なものだ。……それも、何故か人気につながってるから不思議で仕方ない。

ちなみに、勿論だが美形ダブルの片割れは目の前にいるエルスに
いだ。

「はいはい……ってロスアもでるとなると、これはまあ、美形御一行決定だな。」

ふうつとため息をつく、エルスにいに笑われた。……いや、マジだから。

「美形御一行？ってどういう意味だ？」

「ん？あーいや、その召喚した勇者様——アキ様っていうんだけど、その人がまあ、美形なのさ。エルスにいレベルに。それで、エルスには勇者様御一行に入るの確定みたいなもんでしょ？」

「いや、確定じゃないけど。」

途中で苦笑いをはさむエルスにいため息をつく。

——この人が確定じゃなかったら、世の中の魔術師はほとんど弱いと思う。

「おめーは、なんだかんだでエルスにいい好きだもんな。ミーシェアさんの事言えないんじゃないか？」

「……お父様やお母様——とくにお母様ほどではないけど？」

だつてずっと面倒見てくれたし、優しいし。……そう続けようとした私は、二人が微妙な顔をしているのに気付いて首をかしげた。

「なによ？ ロスアも好きでしょ？」

「……まあな、兄ちゃんみたいだし？」

一瞬、口の中で「お前はそんな奴だった」とか聞こえた気がするけどスルー。

ロスアが答えたところで、話を続ける。

「んで、ムカつくけど、一応ロスアも顔と剣術だけはいいし。」

「ムカつくとだけは余計だ。」

「まあいいじゃん——で、だから美形御一行になるっていつてんの。」

「

軽く流した私をロスアは不満げに見ていたが、やがて諦めたように手を頭の後ろに組んで空を仰いだ。

「美形……ねえ。まあ、頑張るわ。」

「頑張らなくても受かると思っけどね……まあ、せいぜい死なないように頑張れ。」

明日は勇者同行者を決める大会。

興味は無かったが——見てみるとするか。

そう決意して、私はアキ様の部屋の隣——控えている部屋に向かった。

第十話 アイル 「メンバーが決まりました。」

会場にはたくさんの人が集まっている。

ここは、王宮の競技場——ただいま、勇者様御一行を決めるトーナメントが行われている場所だ。

勇者様は真剣に勝負を見ているが、基本的に私を除いた侍女仲間達の視線は二人の人物以外はあまり向けられない。

そしてその人物——幼馴染みのダブル美形は、ちやくちやくと勝利を重ね、それぞれ魔術部門、剣術部門の決勝戦まで上り詰めた。

「あんな、あんな美形の幼馴染いるんなら言いなさいよ！あれじゃあ、勇者様で大して騒がないのも頷けるわね……で、どっちよ？」

テレシアにつつかれてそちらを見れば本日何度目かと言いたくなるほどに聞きなれた質問をされる。

「どっちよって？」

「あんたが好きなの、もしくは付き合ってるのはどっちよ？」

試しにぼけてみると、当然というように言われた。

「別にあの二人の中とは言っていないんだけど……付き合っていないし。っつーか、言うんでも？」

「つまんないのー。」

「つまんなくない——あ、決勝戦始まるよ？」

周りが騒がしくなったので勝負をする台を見ると、エルスにいとロシアが台にあがって、相手の人とむきあっていた。

「おーおー、幼馴染み様二人、共に決勝戦かあ。すっげえね。」

横のテレシアの呟きに小さく頷く。

「まあ、あいつらは村でも有名だったしねえ。うちの両親もベタ惚れで。本人達さえその気になってれば今頃宮廷魔術師見習いになってもなってたと思うよ。」

「え、その気にならなかったの？」

「エルスにいは農家の一人っ子だからねー。ロシアはエルスにいが居ないくらいなら行かないって。」

そついうと、台を見ていたテレシアがこちらを向く。

「それで、なんで今回は来たのよ？」

「んー。エルスにいのお母さんが異常に乗り気で——もともとあの人は元気すぎるくらいだし、本当に年齢的に若いし、ただエルスにいが心配し過ぎただけだしね。それで、うちのお母様もなんかあったら人雇って手伝わせるっていうし、ロシアは単に一人でこっち来るのが嫌っただけだったから、エルスにいもロシアも来たみたいだよ。」

「ふーん……あ、終わったみたいよ。」

なんだかぐだぐだな私の説明に取り敢えず納得したテレシアが再び台に目を向ける。

私も目を向けると、エルスにいてもロスアも微笑んで礼をしていた。
——本人共にそのつもりはないんだろうが、これが私的には結構いらつとくる。

……それはともかく、これで勇者様御一行のメンバーが決まった事になる。

ここで適当に紹介をしておこうか。

御一行はアキ様を除いて五名。

一人目は我が幼馴染みエルス。スィルスール。魔術のトーナメント一位。属性の魔法は水。

二人目も我が幼馴染みロスア。アンライオ。剣術のトーナメント一位。剣は結構重い大剣、つまり本人はバカ力の持ち主。

三人目は金色の髪をした女性。年は私より少し上、テレシアくらい。きりつとしていて、カッコいい美人だ。属性は……多分土。トーナメント三位。……二位の人は、属性が水だったから外されたんだと思う。アキ様が申し訳なさそうに謝っていた。

第二位さんが女だったこともあって、そこまで文句も言わず帰っ

て行った。

四人目は白っぽい髪の剣術士。小さなナイフを自由自在に操っていた。トーナメント二位だけど、ロスアがぎりぎり勝てた、というか負けそうだった位強い。

五人目は宮廷魔術師見習いのノアト様。なんだかとってもエルスとロスアを気に入ってた。……なぜか私も仲良くなった。

さて、パツと見て言っていると感想はひとつ。

……神様、不公平すぎやしないか？

先代勇者様が広めた言葉で、「天は二物をあたえず」とかあったけど、あれは嘘だな。

第十一話 レナサード 「勇者様の印象。」

——王宮では無い所って、こんなにも楽しかったらどうか。

「すっごい、ふかふかー」

ふかふか、と笑顔で玉座に埋もれるあたしに、まお……トズが苦笑した。

「ちつとは元のお淑やかさを残したらどうだ、姫君？」

「これでいいっていったのはトズでしょー。っていうかなんでまだ呼び方それなのさ。」

むすつと頬を膨らませるあたしにトズが苦笑したままその手をあたしの頭に乗せる。

「はいはい、レナ。……ん？どうした？」

そのままばんぼんと頭の上で手を動かしていたトズがあたしの顔を覗き込む。

「どうしたって？」

「顔、赤いぞ？大丈夫か？」

「……………」

こいつは妙なところで無自覚だな、と内心呆れながら、なんでもないと手を振る。

トズはしばらく不思議そうな顔で首をかしげていたが、ばたばたと慌ただしい足音が聞こえてきて視線を前に向けた。

「魔王様、妃様！」

「妃様いうな。」

「レナ、お試しても妃だ。我慢しなさいな。」

あたしの速攻の突っ込みにトズがにやと笑みを浮かべる。

走ってきた人型の魔物は、しばらくそのやり取りを見ていたが、トズの無言の促しに我に返って報告を進めた。

「王宮が勇者を召喚したようです——しかも、強力な力の勇者だとか……。……あ、もちろん魔王様の方がお強いと思いますから拗ねないでくださいねっ」
「誰が拗ねるかあっ！」

トズが真っ赤になって突っ込むのがなんか可愛い。
魔物もにやと笑っていて、なんというか……。……ある意味期待外れ。この人達。

……。そうじゃなかった。
思いつき忘れていたが、うちは召喚ができるんだった。いまいち実感がわかないが、一応あたしも“魔王にさらわれた”んだから、召喚してもおかしくない。

……。やばくねえか？

隣のコレがどれくらい強いのか知らないが、強力な勇者——光の力の持ち主が召喚されたということは勿論ここに来るだろう。

別に心配する立場じゃないのは分かっているが、この陽気な、予想とは食い違いすぎる“魔物”が消滅するというのが、どこか嫌だった。

——そう考えてから、やっぱり気に入ってたんだな、とどこか納得していた。

「勇者は。」

「なんででしょうか姫様。」

「いちいち目をきらきらさせるな。……で、どんななの？」

“妃”と発するたびに顔を上げて目をきらきらとさせる魔物に突っ込むと、つまらなそうな顔で唇を突き出された。

……本当になんなんだろ、この魔物。

そう思っている間に、魔物さんが紙を渡してくる。

「……顔で選びましたの？この方々。」

率直な意見にトズが噴き出す。

「……いや、だって、これ……。」

「んー、確かに顔で選んだみたいなの顔ぶれだな。」

「……なんか、弱そう。」

ぼそつと言った呟きに魔物さんが噴き出す。

「ふふっ、ははっ、王妃様。見た目で判断するものではございません……ふふっ」

にやにやと笑っていた魔物さんが再び噴き出した。

そんな事を言われても、と再び写真に目を落とす。

赤いマントと鎧を付けた勇者とみられる中央の少年に私が持った印象はただ、弱そう。だった。

第十二話 アイル 「出発日」

おっとりとした優しい方だが、流石は勇者様、ということだろうか。

数日の間に、アキ様はみるみる強くなった。

そりゃあもう、侍女仲間の鼻屑目無しでも文句なしに強い、と言える程。

「アキ様。お早う御座います。」

「ああ、アイルさん。お早う御座います。」

……ああ、わざとらしいほどどんより暗い雰囲気がもうウザイ。心の中でため息をつきながら、アキ様に視線を戻す。

「本日は午後から出発ですので、午前中は空いております。アキ様は皆様への御挨拶があるとは思いますが、お昼になりましたら風の間にはいらしてください。」

「はい。……ところで、後ろの方々はどうしたんですか？」

アキ様の言葉に後ろを向く。

「ああ——別にアキ様は気にしなくてもいいのですが……。」

後ろには後輩侍女達が並んでいる——のだが。

その侍女達は重苦しい、どんよりとした暗い雰囲気をもっており、当初の笑顔などどこにも見受けられない。……それでも後輩の中では優秀な者達だということが余計に悲しい。

まあ、その気持ちは分からなくもないが——アキ様付きの後輩侍女五人中残っているのがアミナー人だけだというのは、教育係にも

なっている身としては悲しい。

この中では最も先輩で最年長であるテレシアに至ってはため息を隠そうともしない。

「……まあ、皆アキ様に会えなくなるのが寂しいですよ。」

ふうつとため息をついてから言うと、アキ様が苦笑する。

「……アイルさんも、大変そうですね。」

……アキ様にまで苦笑いされたじゃないか。

再びため息をつく、前からくすくすと笑い声が聞こえてきた。

「……アキ様？」

相変わらず笑っているアキ様に思わず眉を潜めて言うと、アキ様が——これは、笑いをこらえているんでしょうか？……口元がひくひく動いてますが。

「いや——すみません。そのお、あれです。エルスさんとかロスアが言ってた通りだなあっと。」

……。

「ちょ、アイルさん！？いや、悪口とかではなく、いや、その……きつちり真面目そうで実は違ってたただけで……いやほんとごめんなさい！」

……む？なんでアキ様が謝ってる？……あれ、後輩が後ずさりしてる？

「……アイル。」

「なに、テレシア？」

「……殺気がただ漏れよ。」

……成る程。だから皆後ずさってるのか。

なるほどねー、と納得した私を、アキ様が相変わらず引き攣った笑顔で見ってくる。

……ふむ。

私はわざとらしいほどに――――
―――つつつこり笑って見せた。

……アキ様がびくつとしたのはこの際気にしないでおう。

第十二話 アイル 「出発日」(後書き)

久しぶりの投稿です。

・・・そのまま出発するはずだったのに、なぜこつなつた。

第十三話 アキ 「同行者の幼馴染」

「エルス！ロスア！すまん！」

顔を合わせるなり謝りだした僕にエルスとロスアが驚いた顔を浮かべる。

「……アキ。いきなり謝られても私もロスアも訳が分かりませんよ。謝ることになった経緯を教えてくださいませんか。」

ロスアよりも早く表情を戻したエルスが首をかしげる。

「いや——その。なんというか……。」

「なんだよ。なんかやかしかしたのか？行きたくない——って事はないか。内容によっては怒るから早く話せ。」

「ロスア。仮にも勇者様に向かってその言葉遣いはやめなさい。」

「僕にはエルスは毒舌に見えるんだけど。」

「それは俺も同感だ。」

思わず突っ込む僕にロスアが同意してくれた。……仮にもってなんだ仮にもって。

「で、なんなんですか？」

僕の突っ込みを綺麗に無視したエルスが笑顔で聞いてくる。

「無視されたような——まあ、いいや。あの……怒らせ、ちゃったっぽいんだよね……。」

「誰をだよ。」

「そのー……アイルさん。」

その名前を口にした瞬間、ロスアの顔が引き攣った。

「一応聞くけど、どれくらい？」

「まあ、顔色変えてアキが素っ飛んできたくらいだから想像はつきますけどねー。」

「……いいから、どれくらい？」

のんびり言うエルスに、ロスアがさらに口の端を引き攣らせる。

「……殺気ただ漏れ状態まで。」

「……つまり俺らがアイルの事を話してた的なことを言ったら、殺気が漏れ出した、と。」

「俺ら、というより恐らくロスアが殆どでしょうがねー。」

「いいからエルスには黙ってくれ。」

相変わらずのーんびり言うエルスとは対照的に、ロスアの口はまだ引き攣っている。

アイル「ミィシェアさん。

僕についてくれているメイドさ……もとい、侍女さんの一人で、こっちにきて一番仲良い女の子と言っても過言ではない。

肩より少し長いくらいの茶色い髪に、茶色い瞳。笑うとほわっと空気が緩むような、元の世界で言えば癒し系だ。

……普段がそんな分、怒るとかなり怖かったが。

目の前にいる二人の幼馴染みで、この二人を全く意識してない数少ない女子の一人である。

「ああ……マジで怖すぎる……。」

頭を抱えるロシアをエルスが面白そうに眺める。……普段優しいのに、なんでこんななんだか。

「エルスって……本当にドSだよな。」

「どえす？」

「それも無いのか……。」

普段使っていた言葉が使えないのは本当に厄介だと思う。……言葉勝手に翻訳してるんだから、この世界で一番近い物にしてくれればいいのに、こういう言葉はそのままだからな。

「ドSか……確かにぴったりだな。」

意味を教えてやるとロシアがため息をつく。

「そういう意味でもエルスにいとアイルは似てるよな……。」

「どういう意味で？」

「普段つぽくないのに、実はいろいろと怖い……っていうかそのさどすていつく？な所。」

「え、アイルさんってサドスティック？」

思わず聞き返すと、ロシアが苦笑した。

「お前にはまだ外面向けてるもんな……まあ、アイルの実態は今度話してやるよ。間違ってもあんなの好きになるなよ。」

「なにその心配。」

「だってお前、ふらーと変な奴好きになりそうだし。アイルと仲いいじゃん？」

「僕をなんだと思ってるんだよ……。」

元の世界でも言われたことがあるが。

「まあとにかくアイルは怖い。その、加虐趣味な奴だ。」

……ドSって言葉がないと、なんか異常に怖く感じるぞ。

「お前は僕の親か何かよ。」

……っていうかそれが本当の理由かねえ……。

思い当たる別の理由に思わず頬が緩む。

……元の世界じゃ、人の色恋沙汰をあんまり客観的に見れなかったもんなー。……何故かよく巻き込まれるから。

「……二人とも、本来の話題から大幅にずれてますよ?」

……あ。

エルスの指摘で最初の話題を思い出した僕は、同じく思い出したロシアにちらりと視線を向けた。

「……まあ、うん……頑張れ。」

「なにその丸投げ!？」

……ロシアの抗議は聞かなかったことにする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5811w/>

勇者様に恋しなければいけませんか？

2011年11月16日23時20分発行